

英語を専門としない大学生への英語教育

—一般教養英語と特定目的英語の観点から—

寶 壺 貴 之

Teaching English to Non-major University Students in Japan: From the Perspective of English for General Purposes and English for Specific Purposes

Takayuki HOKO

要 旨

グローバル社会を迎え、小学校における高学年での英語教育の教科化が目前となり、日本の英語教育の目的はコミュニケーションのためであるという見解は定着している。他方、英語に対する重要性の認識は高まっているものの小学校では地域、公立・私立による格差及び指導方法に関する問題や、中学校・高等学校における英語による英語授業の実施、大学レベルでは18歳人口の減少による多様化した入学者の問題など、改善しなければならない点も多いのが現状である。将来的に小学校低学年から英語教育が導入されることに伴い、幼保・小・中・高・大連携の英語教育についてこれまで以上に体系的に考察する必要があると言える。本稿では、英語を専門としない学部へ入学した大学生に対して学習動機づけを高めるための一般教養としての英語教育について言及し、さらにその学生の専門にも関連した特定目的の英語の観点からも、多角的に大学英語教育について考察する。

キーワード：一般教養英語、特定目的英語、映画利用、幼保小連携、リメディアル英語教育

I. はじめに

小学校での英語教育の導入や、高等学校での Super English Language High School の取り組み、そして実践的コミュニケーション能力の養成を目標としたうえでの英語の授業を英語で行う新カリキュラム上の外国語科の必修化など、日本の英語教育に於けるコミュニケーション重視の方向性は益々顕著である。また『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』が閣議決定されるなど、英語教育は重要な時期を迎えている。このような時代の中で改めて、大学の英語教育に目を向けることは重要である。なぜならば、18歳人口の減少や入試の多様化による入学者選抜競争の緩和によって、入試科目から英語を除外する大学も増えて大学入学者の英語力の低下をもたらしているからである。この結果、同じ大学においても、文法や構文の初歩から教えないといけない学生から留学志望の学生まで入学して、大学の英語教員の直面している問題はあまりにも多様化した学生のため、大学の同一クラス内での一斉授業が成立しにくくなっているということが挙げられる。また、グローバル化が叫ばれている今日、大学によっては、学部の専門科目の半分以上を英語で学習するというプログラムを行っているところもある。大学における英語

教育は、1991年の大学設置基準の大綱化以降、徐々に変化を遂げ、一般英語のカリキュラムには、英語の必須科目数や必修単位数が大学や学部学科によって多様化し、通年科目は殆ど半期で終了する科目となり、科目名には授業内容が分かる名称も付けられるようになった。

本稿では、このように大学設置基準の大綱化以降の英語教育の変化に伴い、また小学校からの英語教育の導入も考慮に入れて、今後の大学英語教育において一体どのような教育が可能であるかを検討する。

II. 研究目的

本稿では、多様化した特に英語を専門としない他分野を専門としている大学生に対して、一般教養英語と共に、専門教育にも関連した語学力の養成も目指した教育活動の展開について考察することを目的とする。第一に、幼保小の現在の英語教育の連携についてさらに、中学校、高等学校段階での英語教育を考察し、第二に、高等学校段階までの英語教育の現状と流れを把握した後に、大学段階での英語教育について現状を考察する。大学段階での一般教養としての英語教育のありかたと共に専門科目と関連した特定目的の英語教育のありかたについて検討する。

III. 研究方法

将来的に小学校低学年から英語教育が導入されることに伴い、幼保・小・中・高・大連携の英語教育についてこれまで以上に体系的に考察する必要があると言える現状で、1 幼保、小、中、高の英語教育の現状とどのような連携が必要かを文部科学省の資料、実際の授業見学、セミナーへの参加等の活動から総合的に検討する。2 大学での英語教育において、英語を専門としない学部へ入学した大学生に対しての一般教養としての英語教育とその学生の専門にも関連した特定目的の英語教育について事例を中心に考察する。具体的には、岐阜聖徳学園大学短期大学幼児教育学科で行われている実際の英語授業の内容・カリキュラム構成について検討し、さらに今後、一般教養としての英語教育と特定目的の専門に関連した保育英語の英語教育の相互作用の可能性について、授業の方法論や具体的な教材について提言を加える。

IV. 幼保・小・中・高の英語教育

IV-1 幼稚園・保育園での英語教育

小学校に英語教育が導入される以前から、日本の幼稚園や保育園では様々な形で英語教育が導入されてきた。例えば、園児に対して「歌の時間」で英語を楽しく習ったり、ネイティブの英語教員をゲストスピーカー的に月に一回程度、招いてゲームをして遊んだりという学習方法を取っている園から、インターナショナル系の幼稚園では、国語と体育の時間以外すべてを英語で学習させるという学習形態を取っているものまで様々である。即ち、公立私立の幼稚園、保育園が小学校、中学校での英語教育を前倒ししている内容を行っている園から言語の気づきや楽しみの一環として行っている園まで千差万別である。小学校へ入学すれば、私学を除けば、6年間は授業としての英語はなくなり、また中学校で再開するというのがこれまでの発想であった。しかし、これから本格的に公立小学校高学年での教科としての英語教育が始まり、また低学年、中学年でも授業としての英語の授業が始まると、当然、幼保・小連携の英語教育について考察することが必要になってくる。

その際、実際には小学校英語教育の前倒しになるのではなく、言語の気づきに重きを置き、園

児の発達段階を考慮して取り組むことが最も重要である。田中編（2015：179）¹⁾では、「小1プログラム」について、「話が静かに聞けない」、「姿勢が乱れている」、「勝手にしゃべり出す」などの問題について「幼小連携教育カリキュラム」を下地として研修を通して「日常的に相互の人材交流を図ることの重要性」が述べられているが、まさにこのことが英語教育でも応用できる。即ち、ただ単に小学校へ行ってから困らないようにと先行した英語教育だけをするのではなく、小学校段階での英語教育についてよく理解したうえで相互の交流をもとに進めることが大切である。

著者は、以前に日本のグローバル化ということを念頭に、幼稚園教諭と小学校教員の研修向けに『幼稚園教育要領・小学校学習指導要領』の日英対訳の共訳を行ったことがあるが AIS 編（2009：25）²⁾の「言葉」（Language）のねらいの（2）で、

To experience the joys of listening carefully to what other people are saying and talking about, of telling about your own experiences and thoughts, and of talking together.

とあるように、先生や友達の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことを話し、伝え合う喜びを味わうことの大切さについて述べられている。まさに五感を持って経験したことの大切さを生かすという点で、前述したように歌を中心に楽しく学習させる方法や、絵やメディアなどの視聴覚教材を大いに利用することが望ましいと考えられる。また、幼保小の連携の観点からは小学校からアルファベットを学習するというのを念頭に、英単語の綴りと発音の基本が分かるフォニックスをゲーム形式で、導入してみるなどの試みも発展学習として考えられる。いずれにせよ、小学校低学年の導入が決定された段階で、幼保小連携の教員研修を行うことなど相互の連携が課題となる。

IV-2 小学校での英語教育

小学校の英語教育について論ずる前に、先ず現在の小学生の「あわただしい生活」について考察する。前述の田中編（2015：177）³⁾では、現在の児童について述べられている。「今、児童は忙しい」のであり、学年や地域、個々人によって多少の異なりはあるものの、児童は様々な課題と向き合わざるを得ない現実になされていることがよく分かる。「お稽古事」や「塾通い」が、こどもたちの日常生活を圧迫していることは過去も現在も確かである。その中で田中編（2015：177-178）⁴⁾の、「大人にとって、自分の小学校生活は、懐かしく語ることのできる、人生にとって意義深い時期であるはずである。」との見解は英語教育を行う際にも役立つのである。即ち、人間は自分の良かった時代を振り返りそこから、逆境や挫折に立ち向かうための力を得るのである。そのような時代が小学校時代にあった経験に反映されることが多いことが述べられているが、まさしくこの大切な時期に英語教育を行うことの意味と意義を考えておくことが教師にとってもとても重要であると考えられる。

小学校への英語教育の導入を歴史的に振り返ると、文部科学省が平成16年度に行った小学校英語活動実施状況調査⁵⁾では、調査対象となった小学校22,481校のうち、「英語活動」を実施したのは20,700校で全体の92.1%であり、未実施は1,781校で全体の7.9%であった。この実施校のうち、第3学年以上で「英語活動」を実施した学校数と教育課程上の位置づけは下表のようになり、総合的な学習の時間で英語活動を実施している学校が多いことが理解できる。英語活動の指導者は学級担任が行う学校が約9割を占め、ネイティブや英語専門の先生は補助的な役割が多く、活動内容は歌やゲームなど英語に親しむ活動や簡単な英会話（挨拶や自己紹介など）の練習が多い

ようだ。

表 1 小学校英語活動実施状況調査（文部科学省平成16年度）

	実施学校数	総合的な学習の時間だけで実施した学校数	特別活動だけで実施した学校数	その他だけで実施した学校数	総合、特別活動及びその他の時間を組み合わせて実施した学校数
第3学年	18,861校 (83.9%)	16,216校	700校	796校	1,149校
第4学年	19,199校 (85.4%)	16,111校	856校	761校	1,471校
第5学年	19,368校 (86.2%)	16,292校	824校	757校	1,494校
第6学年	19,739校 (87.8%)	16,651校	803校	748校	1,537校

10年以上前の小学校の英語教育は、総合的な学習の時間を多く利用して英語活動が行われていた。総合的な学習の時間では国際理解のための学習も行えるが、そもそも総合的な学習のねらいは、「自ら学び、自ら考える力の養成」や、「学び方や調べ方を身につけること」であって、必ずしも英語教育に特化した内容でなくてもよい。また内容については学校間で格差ができるという問題も含んでいる。さらに、例えば岐阜県の大垣市や瑞穂市の小学校のように研究開発校として、特別に小学校の英語教育が始まっていること等を考慮すると、慎重な議論は必要であるが、今後アジアの諸外国のように本格的に教科化していく方向にはまともっていくように思われる。しかし、松川（2006/10/31）^{註1）}によると平成18年3月に伊吹文部科学大臣の先ず国語を優先すべきであるという発言により、当時は、必修や教科化の議論が続けられる段階ではあったが、全国の小学校5、6年生に導入された現在、教科化への方向に邁進しているのが現状である。

松川（2006/10/31）及び、「小学校における英語教育について（外国語専門部会における審議の状況）」（2006/3/27）^{6）}によれば、小学校英語教育充実のための視点として次の三つが掲げられていた。

- ①現代の子どもたちには、他者を理解し、自分を表現し、社会と対話をするための言語コミュニケーション能力を育成することが課題
- ②小学校の段階では、子どもたちにとって意味のある活動の中で、英語を用いて、相手を理解したり、自分を表現したりすることの楽しさを実感を持って体験させることが重要
- ③小学校の教育では、言語や文化への幅広い関心を持たせることが重要

との報告は小学校で何を重視するかという点で重要である。つまり、小学校の英語教育を現段階の授業数、カリキュラム構成等で考察すると、小学校段階の英語教育の目標は大きく分けてスキルをより重視する考え方と国際コミュニケーションをより重視する考え方の二つのうち、理想は両面を延ばすことであるが、現在の日本の教育ではより後者の国際コミュニケーションを重視する考え方に立脚している。その意味で、主体は担任の先生であり、ネイティブと英語教員の三位一体の協力体制で授業が成立するのである。小学校英語活動の目的を達成するためのカリキュラムとして、①状況分析 ②授業学習目標 ③教え、学ぶ教授学習内容 ④教授学習材 ⑤指導技術 ⑥評価材（松川 2003：148）^{7）}で述べられている6つの項目を考察すると、このカリキュラ

ムは、まさに言語習得だけではなく、英語に関する興味、関心や意欲を育てることを目標としており、このカリキュラムによって人間性を高め人格教育にも繋がると考えられる。

以上のことから、小学校の英語教育は今後、教科化そして低学年での導入がされることは必至でその意味では小学校に英語専科の教員も積極的に採用される可能性もあるが、中学校、高等学校との連携も十分に考慮されたうえで、また中学校や高等学校の前倒しの学習だけではなく、学校教育の目的からも決まったことを覚えるなど型にはまらず、多様な活動を通して子どもが英語や異文化に興味を持ち、人と関わる広義のコミュニケーションへの積極的な態度を養うことも重要視する必要がある。即ち、前述の田中（2015）にもあったように、小学校での経験の意味がとても大切であるからこそ、中学校や高等学校の前倒しで、英語嫌いの低年齢化を助長するようなことは避けることが大切である。これまで、日本人が英語を苦手とするのは、日本語の構造が英語と異なることや、英語を使用しなければならない環境が極めて少ないということ以外に、中学や高等学校であまりにも強い「正確さ」を求めすぎたことにも原因があるとも考えられる。現段階で、公立の小学校では、5年生で年間35時間、6年生で35時間、計70時間という時間数であるが、この量で英語の力が十分に身につくとは考えにくい。即ち「自分の伝えたいことが相手に伝わり、外国の人とコミュニケーションを図るのは楽しい」という、相手とコミュニケーションを図るという姿勢が小学校ではとても大切である。その意味で、ESL^{註2)}の学習方法を児童英語教育として導入しているまたは、小学校段階から多くの他教科科目を英語で教えるインターナショナル系の学校教育の考えとは根本的に異なる。そして、全科一担任制である日本の小学校教育の特色が生かされるのが、英語が専門でない担任の日本人の先生がモデルになることで母語と異なる言語を使つてのコミュニケーションの楽しさと可能性を教えることができる。

IV-3 中・高等学校における英語教育との連携

これまでの、小学校との連携をあまり考慮に入れず中学校での英語教育が行われていた様子があるが、2000年代前半位からは小・中・高の連携を考慮に入れた研修会も多く開かれ交流が盛んになってきた。前述の「小学校における英語教育について（外国語専門部会における審議の状況）」（2006/3/27）⁸⁾では小学校と中学校と高等学校との連携について以下のことが報告されている。

「高等学校の教育までを見据えて、小学校、中学校、高等学校の外国語教育がそれぞれのよいな役割を果たすべきかを検討する必要がある。」

「中学校においては、小学校段階での英語活動を通じて、英語を聞くこと、話すことについて一定の素地があることを踏まえて、読むこと、書くことを含めて四技能を調和のとれた形で充実させることが適当である。」

「このように、高等学校までの英語教育の目標や内容を整理することによって、英語力向上の道筋を明確にし、小・中・高等学校教育の連携を密接なものとするができることと考える。小学校における英語教育は、会話表現、文法などの英語のスキルを身につけさせることを直接のねらいとするものではない。小学校では、この段階にふさわしい英語でのコミュニケーション活動を行うことが、中・高等学校での英語教育の改善とあいまって、実践的コミュニケーション能力の向上につながると考えられる。」

（外国語専門部会における審議の状況資料3-1 2006：11）

先ず、中学校について考察できることは、今回の審議で改めて、「読むこと」と「書くこと」の文言が出てきて四技能の調和となっているので、これまでのオーラルコミュニケーションを重

視しすぎた中学校での英語教育の反省点を踏まえていることを理解することができる。つまり、中学校段階では、小学校での素地を踏まえたうえで、今後もう少しリーディングとライティングにも力を入れながらバランスの取れたスキルを身につけさせるという「ゆとり教育」時代からの改善案が示されたことが考察できる。

次に、高等学校の目標は、小・中学校の英語教育の目標や内容及び達成度を踏まえたうえでの、本格的な実践的コミュニケーション能力の向上である。ここでは、Widdowson (1978)^{註3)}に挙げられている、usage「言語用法」と use「言語使用」の両方の習得が目標になるであろう。また「英語が使える日本人の育成のための行動計画」によると、平成20年度を目指した目標のなかに、「地域に英語教育に関する先進校」を形成することが置かれていて、「英語の使える日本人」構想という政策実現を目指して、先進的な英語教育を実践・研究できる高等学校をスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (Super English Language High School) として110校までの指定校を拡大することを目標としてきた。その結果、これまでそれらの学校を拠点として、有効な英語教育プログラムを開発、その成果が全国の高等学校に広がりつつある。ちなみに、ディベートや TOEIC 等の検定試験また海外留学等、それぞれの学校の様々な活動について、早くもその結果を考慮して、多くの大学入試などで英語の入学試験の代替にしている大学も出てきて、大学入試に影響を及ぼしているという点も報告されている。即ち、SEL-Hi 指定校と指定されていない高等学校では英語力のレベルにも相当な差が出始めていて、高校生の英語学力は二極化傾向にあるのが現状である。最近では国内の大学のみならず、留学という形ではなく、直接に海外の大学に進学希望をしている高校生も増えて、海外の大学入学に対応して教育する高等学校も出てきている。さらに、英語による英語授業の導入もコミュニケーション重視の英語教育に良い方向を与えていると解釈することができる。また、センター試験に代わる大学入学試験での英語に関して英語検定や TOEIC などの外部試験の結果を導入することも本格的に今後、検討されることから、これからの高等学校段階での英語教育を劇的に変化していく可能性を含んでいるであろう。

ここまでの考察からも、幼保・小・中・高の連携は益々重要であり、特に小学校での英語活動では、広義の人間的コミュニケーションにフォーカスを当て、また中学校と高等学校では小学校でできた英語の素地を大切にしながら、スキル部分を伸ばしていこうとする態度が見受けられる。そして、高等教育機関段階では、相当な英語力の差が出ている多様化した学生が大学に入学することになる。

V. 大学での英語教育

V-1 入学してくる学生の現状

小学校から英語教育が始まり、高等学校までの間に、多様化された英語教育を受けた学生が大学に入学しているのが現状である。具体的には、筆者の所属学部における学生について考察を進める。まず、入学試験の傾向については、岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科の入学生、第一部約100名と第三部約50名の合計約150名の学生のうち、入学試験時に英語を受験した者は、ここ5年間の平均でも15名前後であることから、この学生つまりある程度英語を得意とする10%の学生と残りの90%が英語に対して何らかの不安感を抱いている学生が同時に入学してきていることになる。また、短期大学部のカリキュラムと2年ないしは3年という限られた修業年限の中で、多大な授業を受講しなければならず、レベル別クラス分け編成を行うことができず英語の

授業を受講しているという現状がある。この章では、多様化した英語を専門としない学部へ入学した学生に対して大学では、どのような英語授業が展開されているかを考察し、授業内容及びカリキュラム構成の改善点も含めて検討する。

文部科学省は平成13年4月より「大学卒業に必要な124単位中60単位を対面授業と同等の遠隔教育（自宅等での学習も可）と試験によって単位を与えてよい」⁹⁾との規制緩和を認めた。このことによって大学での教育における e-learning の活用は益々今後進められるものと想定される。つまり、多様化した大学1年生に対して、リメディアル教育の一環としてまた、さらに進んだ学生に対しては、advanced level の教材活用の一環としていずれにせよ今後、e-learning を利用した大学教育は大いに展開されるのである。しかし、英語教育のみならず大学教育で目指すべきものはスキル教育と同時に人格形成及び人間教育であることから両面を伸ばすことのできる授業展開が大切であり、そのための科目設定および講座が必要となる。しかし、英語教育のみならず大学教育で目指すべきものはスキル教育と同時に人格形成及び人間教育であることから両面を伸ばすことのできる授業展開が大切であり、そのための科目設定および講座が必要となる。

V-2 大学での英語科目の現状と改善について

大学での英語を専門としない学部へ入学した多様化した学生への一般英語教育およびリメディアル英語教育について考察するために、一例として具体的に筆者所属の幼児教育学科で行われている現在の英語授業の内容・カリキュラム構成について改善案を含め、考察したい。本来、大学英語教育についての大きな方向性については、1 入学前教育としての英語教育（入学前英語教育）、2 入学後初年時教育としての補習授業的な英語教育（リメディアル英語科目）、3 学科内の講義科目としての英語教育（一般教養英語科目）、4 就職活動のためのキャリアアップの試験対策等の英語教育（キャリアアップ教養英語科目）、5 学部高学年及び大学院も含めた専門書講読を含めた専門科目（専門教養英語科目）としての英語教育の5段階のレベルが考えられる。

この5つのレベルと現状、幼児教育学科で開講されている英語科目（英語ⅠⅡ、英語ⅢⅣ）との関連性を考察し、今後どのように改善すべきかまた新たに開講されると良いと考えられる科目について、考察結果を述べる。

V-3 入学前教育としての英語教育（入学前英語教育）

本学では、入学前の12月に入学前準備講座が用意されているが、主に幼児教育学科としてどのようなことを学ぶのかあるいは入学前までに読んでおいたほうが良い書物等についての教育を行っているのが現状である。つまり、英語に関しては何も課していない。ここで、提案として、現段階では、1 高校までの補習を主たる目的としてスキル向上を目指す教育と、2 Motivation を高めるための教養を高める教育の両面が考えられる。ここで、本学ではもし1に主を置くならばメディア教育開発センター等が考案してリメディアル教育学会でも推進されているような教材を利用する可能性はある。または、今年度より全学的に始まったMANALOG「マナログ」^{註4)}という e-learning system が稼働しているので、そこに英語のリメディアル教材等を添付しておいて、入学前の学生に解いてもらうという方法も考えられる。しかし、前述したように高等学校段階までで、英語に対して苦手意識を持っている学生に高等学校レベルの問題を入学前に解かせることが入学後の学習意欲の喚起につながるかどうかは疑問である。そこで、次のようなこと

を提案したい。

高等学校段階での学習状況を考慮すれば、英語の専門でない学部への入学者に対しては、入学前教育では先ず2の部分の伸ばす教育を行うべきだと考えられる。いきなり入学前に英語教育・英語学習というよりも、日本語教育・レポート教育など文章力作成の技能と同時に人間教育・人格教育の初段階としてこれから大学でがんばって勉強したいという意欲を高めるための「読書感想文」的な課題を出すことが良いと提案したい。後にどのように英語教育に繋がるかという点、人格教育に関連した書物を日本語で読んで読書感想文を入学前の課題として提出させ、その本は実は英文で書かれた本の訳本であるので、入学後に英語授業等で扱うことによって、入学前教育と入学後教育の相互作用を期待することができる。一具体例としては『モリー先生と火曜日』^{註5)} ミッチ・アルボム著、別宮貞徳訳(1998)を読む。入学後、実際に授業で、*Tuesdays with Morrie* (Mitch Albom 1997) を講読し英語力と人格教養を高める等が挙げられる。

V-4 一般教養英語科目

現在1年次に必須で、英語Ⅰ、Ⅱ、そして、2年次に選択科目で、英語Ⅲ、Ⅳの計4科目が授業で行われている。この科目については、現行の区分では、英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ共に一般教養の英語科目であり、Ⅰ、Ⅱが必須で、Ⅲ、Ⅳが選択科目である。現状について分析する。

英語Ⅰ、Ⅱについては、一クラス50人位のクラスが三クラス存在している。基本的には、英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに関しては、一般教養英語科目であるが、高校までの復習を兼ねたりメディアル教育的な部分もあり、大学レベルで学習したい内容も含め、さらに、昨年度より幼児教育学科のみの専科になったので、将来教職に就く学生が多いことも考え、教員になった時にも生かせる保育英語の内容も取り入れて授業展開を行っているのが現状である。ここで重要なことは、英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ共に、大学生の教養科目として学習すべき一般教養英語と将来教壇に立って園児に教える際に必要な特定目的英語(保育英語)の両方の内容に考慮して授業を進めている点である。

V-4-1) 英語Ⅰ、Ⅱの内容

英語Ⅰ、Ⅱについて具体例を示す。前述したように、先ず一般教養英語の内容としては、モチベーションを高める教材をという観点で、映画を利用した英語教材と異文化理解を考慮した学習教材を開発して学習を進めている。

一般に映像の利点は、その面白さと分かりやすさにある。同じことを言葉で述べても、一枚の写真や、一秒の映画にはかなわない場合がある。映像を利用することに於いては、学習と理解が帰納的である。つまり映像の特徴の一つは、「見てすぐに理解できる」ことである。コミュニケーション重視の英語教育が叫ばれている今日、語学教育に映画を利用することは有益である。映画の英語は演劇の場合と同様、全編コミュニケーションの場であるので、コミュニケーション・アプローチが主流となっている我が国の英語教育には、格好の教材である。

先ずは、将来、教員になった時に活用できる方法として、英語を簡単な英語でパラフレイズするという方法がある。具体的には、下記のように映画『サウンド・オブ・ミュージック』を利用する。1965年のアカデミー賞受賞映画『サウンド・オブ・ミュージック』からの有名な「ドレミの歌」を教える場面である。この歌は、一行ずつがパラフレイズされており、(例えば、一行目はDoeというのはa deerでありa female deer 雌鹿のことである)英語を学習する際に英英辞典を引いて英語をそのまま理解することの重要性について教えることができた。

Doe, a deer, a female deer, Ray, a drop of golden sun,
 Me, a name I call myself, Far, a long, long way to run,
 Sew, a needle pulling thread, La, a note to follow sew,
 Tea, a drink with jam and bread That will bring us back to Doe
 池下編 (1996 : 70)¹⁰⁾

ここで、重要なことは、ドレミの歌のパラフレイズということでは、大学生が英語を学習する際に、学習英英辞典を使用することの重要性を教えることができ、また他方では、学生が将来教壇に立った時に、「ドレミの歌」を日本語で先ず園児に教えたいうえで、自分で描いた絵を用意しておいて、英語のドレミの歌を園児に教えることもできることを授業では考察している。即ちほんの数分の場面であるが、使用の仕方によって大学生にとっても適切な教材にもなるし、園児にも利用することができることを授業では展開している。

映画を英語教育に使用した他の方法としては、大学生がよく知っている俳優についてその人物の特性を学習したうえで、その俳優が出演している映画等を利用して学習するということがある。例えば、ハリウッドスターのアーノルド・シュワルツェネッガーを英語教材として筆者が作成した次の例を挙げる。

Arnold Alois Schwarzenegger was born in Austria in 1947. He grew up in a small village. When he was in middle school he started bodybuilding. He started entering bodybuilding competitions when he was seventeen years old. In the 1960s he went to England to train and to learn English. He arrived in the United States when he was twenty-one years old. He spoke English with a strong foreign accent, but he wanted to become a movie star. When he was twenty-three he became the youngest man to win the Mr. Olympia bodybuilding competition.

He started acting in 1970.. At first he did not have much success, but in the 1980s, his movies became more and more popular, especially the *Terminator* series. Most of his movies are action films, but he has also been in popular comedy films.

He became an American citizen in 1983 and in 2003 he ran to be governor of California. He won and was also re-elected later. Although he is a member of the conservative Republican party, he has supported many laws to protect the environment.

He continues to be very physically active. In 2004 he even saved a man drowning in the ocean in Hawaii.

Takayuki Hoko et al. (2013 : 101)¹¹⁾

上記のように、俳優のアーノルド・シュワルツェネッガーについてその映画スターの人生と活躍が分かるような英文を作成して、教材として提示してそれに対する設問を解くことを最初に行う。ある程度、学習者が分かっている人物だと予備知識があるため、学習する際に抵抗感がなく学生は取り組むことができる。またここで本文作成の際に筆者が留意したのは、ウィキペディア

的な人物紹介になるようなことを極力避け、つまり情報だけを引用した文章ではなく作者が、そのスターの苦勞した場面や困難に遭遇した時にどのように若いときに対処したのかを調べて、それを中心に文章が構成されているので、これから社会へ出ていく大学生にも自分の人生の励みになるような内容にしてあることである。そして、その俳優についてある程度分かったうえで、前述のように、彼が出演している映画を題材に学習を進める。例えば、ここでは、映画『ターミネーター2』を題材にしてみる。映画の中には当然、主題となるシーンがありその中には必ず、一つや二つはその映画の名セリフがある。それを中心に英語学習を進めるのである。

例えば、ここでは、スペイン語ではあるが、英語圏の人々ならば殆ど理解できる、セリフ“Hasta la vista, baby!”を取り挙げた。映画英語教育を専門分野にしている筆者が以前に、映画『ターミネーター2』について、学習用に執筆した文章を利用して学習を進めた。

『ターミネーター2』(Terminator II: Judgment Day, 1991)で、アーノルド・シュワルツェネッガー (Arnold Schwarzenegger, 1947-) 演じるターミネーター T-800 型と、ロバート・パトリック (Robert Patrick, 1959-) 演じる新ターミネーター T-1000型の製鉄所での最後の死闘の場面でのセリフである。この Hasta la vista, baby! というセリフの「アスタ ラビスタ、ベイビー」とは、スペイン語で、「hasta: ~まで+ la: 女性単数形の定冠詞+ vista: 一目会うこと」という単語の意味で、「一目会うその時まで」つまり「さようなら」とか「またいつか会う日まで」という意味になる。「しばらくの間会えない」または、「今度いつ会えるかわからない」といった状況で使用される表現であるが、時には皮肉や冗談交じりで、「もう会わないかもしれない」とか「もう会いたくない」といった意味にもなる。ちなみにこの場面は「じゃあ、またな。」という意味であるが、日本語字幕や吹き替えでは「さっさと失せろ、ベイビー」と訳されている。さらに、映画字幕翻訳家の戸田奈津子氏 (1936-) の「地獄で会おうぜ、ベイビー」という、その場面のニュアンスを端的に伝える印象的な字幕翻訳は特に有名である。また、この映画に主演しているアーノルド・シュワルツェネッガーがターミネーターとして、話す「機械」としての英語が使用される場面が何度かあることもこの映画の英語の特徴である。例えば、何かを質問されて No. という代わりに Negative. と答えたり、No, problem. の意味で、堅苦しく Affirmative. と返答したりする場面がある。ただし、今回の『ターミネーター2』では、前作の『ターミネーター』と異なり T-800 は、ジョン自身を守るプログラムが入力されているほかに、学習能力も兼ね備えているので、ジョンが話す言葉を学習して、より人間的に成長していくのも必見である。さらに、T-800 はジョンやその母親サラとの交流で、言葉のみならず生命の大切さも学ぶことになる。サラは映画のある場面で、ターミネーターが一時もジョンから目を離さずに彼のことを見守っている姿、つまり命を捨ててまでジョンを守ろうとしている姿に、「父親代わりの男はたくさんいたが、本当に父親の役を果たせるのはこのマシーンだ」と、父子像を抱いている。この映画が公開されて、全米の観客層の42%が女性であったという事実を考えると、大ヒット映画である前作が及ばなかった点にまで、この映画が到達したとも解釈できる。また監督ジェームズ・キャメロン (James Cameron, 1954-) も「この映画のキーワードは涙である」と述べているように、人間の感情を理解したターミネーターを通して、「人間愛」という永遠のテーマが、この映画には全編を通して描かれている。曾根田編 (2015: 162-163)¹²⁾

上記の文章の中で、先ず映画の内容について説明して、このセリフ“Hasta la vista, baby!”についても場面と共に映画を見せて説明する。そのような活動によって、帰納的に学習が進められ、また一般教養科目として、ここではスペイン語であるが殆ど英語話者は理解して使用するこ

とがあることなどの知識も増えることが期待される。そして、ターミネーターが使用する言葉の学習に移行する。つまり、ただ単に『ターミネーター2』という映画がロボットの映画であるということだけではなく、人間の心を持ったような場面が上記の場面であり、機械的なコンピューター的な英語で答えてきたのが、この映画の後半では、次第に人間の会話のようになっていくということを授業で学習した。そのことで、Affirmative. と No, problem. の相違も簡単に理解することができた。つまり、一般教養英語科目なので、映像を利用して英語の語学上のスキルを高めると同時に、動機づけも高めながら教養も高めていく授業を展開した。

次に異文化理解のテキストを利用した授業展開について述べる。異文化理解学習に関しては、寶壺 (2002)^{註6)} で具体的な方法を述べた。筆者は Craig Alan Volker 博士と、異文化学習と外国語学習ができる *Internet Surfing: Hawaii* (Craig Alan Volker and Takayuki Hoko, 2001 Sankeisha Publishing) という教材を作成した。この教材は、ハワイを題材にして、文化・歴史・教育などについて英語で学習できるように作成したものであるが、視聴覚メディアとりわけ、ホームページも利用した e-learning 学習もできるように工夫しており、異文化理解と同時に英語学習も展開できるリーディング教材となっている。ここでは、chapter15を取りあげる。

Studying in Hawaii

Education has a strong tradition in Hawaii. When the missionaries came to the Islands and made the first Hawaiian alphabet, it was so easy to use that within a decade, the Kingdom of Hawaii was the first nation with 100% literacy. Today, with a majority of Hawaii residents being of East Asian ancestry, education is still highly prized. This explains why the state has the highest per capita enrollment in private elementary and secondary schools in the United States..

Children in Hawaii are not required to go to pre-school or kindergarten, but most do. Then they go on to elementary school for five years. On each island there is at least one Hawaiian “language nest”, a kindergarten and elementary school where all subjects are taught in Hawaiian. This is in recognition of the danger of the Hawaiian language disappearing. In all public schools, classes are visited regularly by kapuna, older Hawaiians who share their knowledge of traditional Hawaiian wisdom with children of all backgrounds.

Some private elementary schools continue through grade eight. But in public schools, grades six through eight are middle school. Students then go to high school from grades nine through twelve.

After graduation from high school, students who want to continue studying can go to university or community college. There are several community colleges on Ōahu and one on each on Kauai, Maui, and the Big Island. All are public institutions. At a community college, students can learn a skill that will prepare them for work after two years, such as being a hairdresser, a car mechanic, or a computer data operator. Alternatively, they can choose an academic course, which is the equivalent of the first

two years of university. After these two years, students can transfer into the third year of university. Because classes are smaller at a community college than in the first two years of university, and because the instructors are generally teaching-oriented, rather than research-oriented, many students find that going to a community college gives them a better preparation for their third year university subjects than going straight into university right after high school.

The University of Hawaii has two campuses, one in Hilo on the Big Island, and one in Mānoa, mauka (inland) from Waikiki. This is a public institution that also looks after the public community college system. There are also three private universities on Ōahu, Hawaii Pacific University, Chaminade University, and the Hawaii campus of Brigham Young University.

All the universities and community colleges have many students from overseas. To study as a regular student, overseas students must have passed both the SAT and TOEFL tests. The SAT or Scholastic Aptitude Test is a test that all American students also take. It measures vocabulary, reading comprehension, mathematics skills, and logic. The TOEFL or Test of English as a Foreign Language is a test only for students who come from countries where English is not the normal language of communication. It tests listening, reading, and writing skills. The different colleges and universities have different levels that they require on the SAT and TOEFL tests.

Answer these questions in Japanese

1. In Hawaii, education is still highly prized. Give an example of this.
2. Describe the special Hawaiian immersion education program.
3. What is the main purpose of a community college?
4. What is an academic course in a community college?
5. What is the SAT?
6. What is the TOEFL?

Craig Alan Volker and Takayuki Hoko (2001: 58-59)¹³⁾

ここで、ポイントになるのは、ハワイの大学の教育制度について英語で学習することができる内容になっているので、異文化理解の観点からも学習者である大学生は日本の教育制度と比較しながら興味を持って学習することができる。内容としては、前述の映画を題材にした教材よりも、語彙数や構文の使用でより難解な文章にはなっているが、教員が補足説明することと同時に、内容が例えばこの章では、アメリカの大学特に短期大学の制度について言及しているので、学習者は、先ずアメリカの短期大学には、アカデミックコースという編入を前提に、一般教育科目を中心に学ぶ短期大学があることを知り、日本での予備校的な存在がアメリカには大学内にあって大学受験で失敗してもその後頑張れば、編入学というシステムを通して、挽回可能な形態があることを知り、とても興味深く学習できた。また、自分たちが学んでいるようにある特定の職業につくための短期大学のコースもあることを知ると、日本との共通性について深く学習している様子

が窺える。つまり、異文化理解という観点から、多様性と類似性の双方を比較しながら学習できる。そして、短期大学に関する内容ということで、現在の自分たちにフィードバックして学習できた点もより親近感が湧くのであろう。即ち、自分の専門について少しでも関連した内容で英語を学習することが動機づけには重要である。また、設問等を、学内の MANALOG「マナログ」に掲載しておくことで、e-learning system を利用した学習の可能性も今後考えることができる。

この他に、英語Ⅰ、Ⅱでは、授業の最初に5分～10分ほどで、将来自分が幼稚園あるいは保育園で、英語を教えることを想定してクラスルームイングリッシュについても学習している。加藤(2012:3-7)¹⁴⁾に言及されているように、Hello, everyone. 2. How are you? 3. Have a nice day. 4. Good job. 5. Take it easy. など、教室英語で使用される表現をただ暗記して覚えるだけでなく時には、ノートにイラストを描いて自分だったら園児にどのように教えていくのかについても考察している。

V-4-2) 英語Ⅲ、Ⅳの内容

英語Ⅲ、Ⅳでは選択科目ということもあり、これまで数名から十数名という比較的少人数のクラスでの授業展開だったので、構成メンバーは英語を学習することに興味を持っている学生が多いと言える。つまりモチベーションの点では、英語を学習したいもしくは、将来教員になった時に、使用したいという目的のもとこの科目を受講している学生が多かった。ここでは、これまでの授業方法を述べたのち、さらに、一般教養英語から発展してより専門英語に近い、特定目的英語の重要性について述べる。

これまでの授業では、一般教養科目の選択科目ということで、2種類の教材を使用してきた。

先ずは、将来教員になるということを前提にした教材で、映画も利用した人生をテーマにした小説の英語リーディング授業を行った。スキルとしての英語力も高めながら、英語学習の動機付けと英語教育を通しての人格教育や教師教育の意義について考察できる授業を展開した。

人生について書かれた Mitch Albom (1997) 著の小説 Tuesdays with Morrie について講読することにした。この話は、実話でありモリー先生は、長年マサチューセッツ州ウォルサムのブランドイス大学社会学部で教鞭をとっていた教授である。それは、ミッチが大学卒業後、16年ぶりの再会であった。難病 ALS (筋萎縮性側索硬化症) に侵されていたモリー先生は、自分の残りの人生を嘆き悲しむことよりも、人に助けられることを楽しんだ。人生の意味について毎週火曜日に教え子のミッチに、教える講義が始まった。

学習方法としては、学習者から先ず全体的な内容把握させるため、1 日本語字幕付映画を利用した内容把握、2 英語の本文のリーディング、3 リーディングの内容把握問題、4 モリー先生の語録に関するディスカッションを行うというトップダウン的なアプローチを行った。特に全員が必ず予習して内容把握までは努力して完成しておくこと(場合によっては自分の訳と翻訳本を予習段階で比較検討しておいてもよい)によって、4 のグループプロセス的な展開に多くの時間を費やした。具体的に、本文の例を引用する。

The class met on Tuesdays. It began after breakfast. The subject was The Meaning of Life. It was taught from experience. (筆者中略) No books were required, yet many topics were covered, including, love, work, community, family, aging, forgiveness, and, finally, death. The last lecture was brief, only a few words. A funeral was held in lieu of graduation. Albom (1997:1)¹⁵⁾

恩師の生涯最後の授業は、毎週火曜日の朝食後に始まる。テーマは「人生の意味」であり、モリー先生の経験をもとに語られる講義である。参考図書は必要ではないが、毎週様々なトピック即ち、愛、仕事、社会、家族、老い、許し、そして最後には死にまでに関しても自分の意見を求められ、また質問をするようにも要求された。即ちモリー先生の体験を踏まえた人生についての講義である。学習者と共にグループディスカッションをすることで、もし自分がモリー先生だったらどのように行動するかとか、生とは何か死とは何かについて考察することができた。学習者の中には、「モリー先生は決して完璧な人ではないが、教師として、人間として死の恐怖も抱えながら、前向きに生きていく姿に感動した」とか「モリー先生のおかげで、死について考えることが生につながるということが分かった」「モリー先生のような教師になりたい」という感想を残した学生もいた。このように解答が必ずただ一つあるわけではない課題について、皆で話し合うことによって自分の生き方についても再考察することのできる授業展開は、教養教育と共に将来の自分なりの教員像を形成するのにそれなりの意味があったのではないと思われる。

次に、「保育英語」について学習できるテキストを使用した。具体的には、宮田学編『保育英語の練習帳』(2014)を例にとると、

nursery school teacher 保育士 principal 園長 head teacher 主任の先生 school secretary 保育所事務員 part-time assistant 保育補助員 custodian 用務員 cook 調理師 nutritionist 栄養士 nurse 看護師 bus driver バスの運転手
という、単語帳から始まり、

- 1 There are three nursery schools near here. (この近くに3つ保育所があります。)
- 2 Mrs. Suzuki is our principal. (鈴木先生は私たちの園長です。)
- 3 I am a nursery school teacher. (私は保育士です。)
- 4 I teach 3-year-old children. (私は3歳児を担当しています。)
- 5 My class is Sakura-gumi. (私のクラスはさくら組です。)

宮田編 (2014: 12-13)¹⁶⁾

のように、単語帳で覚えた表現がすぐに使用できる英文を使って英語表現を学習できるという「保育英語」を意識した教材になっている。このあとのページには設問もあり、ワークブック形式のテキスト構成になっているが、学生の学習態度としては、少なくとも1年後や半年後に就職先で使用できる英語表現を学習したいという意欲がある。従って、モチベーションの観点からも、英語学習がスムーズに進行する。実際に数名であるが、この英語Ⅲ、Ⅳの科目を履修して、インターナショナル系の幼稚園や保育園に就職した学生もいる現状を考えると、教養目的の英語と専門に関連した英語の有意義な相互作用を目指したカリキュラムや教材内容を検討することは重要である。

VI. 研究の結果

大学の英語教育について、具体的には筆者が担当している短期大学部の幼児教育学科を具体例に一般教養としての英語教育と専門に関連した英語教育について考察してきた。この中で、明らかに英語Ⅰ、Ⅱに関しては、教養と専門の相互作用が行われるように教育していくことを考えてきたが、英語Ⅲ、Ⅳに関しては、専門教育に関連した英語教育について重点を置くという可能性があることが分かってきた。各大学においても、例えば一般教養の英語教育と共に、学年が上がっていくにつれて、各学部の特性に関連した、法学英语や医学英語や看護学英语や工学英語等を扱っ

ている場合が多いので、筆者の担当している学部でも教養英語としての一般英語科目としてメディアや様々な媒体を利用したモチベーションを高めるための英語教育を行うと共に、さらに自分の専門として学習していることと関連した保育英語についても上級学年で学習して一般英語との相互作用することの可能性があることが結果として分かった。

VII. 考察

本稿では、これまで一般教養英語、特定目的英語、映画利用、幼保小連携、リメディアル英語教育をキーワードとして、実践面と理論面から大学の英語教育について多角的に考察した。大学に入学してくる学生の多様性を考慮すると、これからの大学英語教育で必要なことは、第一にリメディアル教育を含めた e-learning を活用した教育で各自が基本的な英語能力を高めながら、また映画や異文化理解等の教材を利用して楽しくモチベーションを上げながら一般教養英語を学習していくことが大切である。第二に、特に大学英語教育で今後求められるのは英語を学習することから手段としての英語で、専門科目を学ぶことの重要性である。つまり英語の学習のために英語を学ぶことも大切であるが、さらに専門のことを英語で学ぶこと言い換えれば、一般教養英語の観点から特定目的の英語の観点から英語を学習することも大切である。その意味で、本論文で具体的に提案した内容では、例えば幼児教育学科の学生には、英語Ⅰ、Ⅱでは、「教養英語」に重点を置き、英語Ⅲ、Ⅳについてはより専門に関連した「保育英語」に重点を置いた教育方法について今後も引き続き継続し、その中で、一般教養英語と特定目的英語の相互のコラボレーションの可能性を引き続き検討したい。

VIII. 課題

第一に、英語Ⅲ、Ⅳで使用したような「保育英語」に関連した教材をこれからも積極的に使用していくことである。それから、さらに発展して、絵本の利用ということにも触れておきたい。絵本の効用は様々であるが、母国語の絵本教育は勿論のこと、外国語教育に関しても絵本を大いに取り入れることは重要である。この時に、大切なことはネイティブが読む絵本というと、日本人の子供たちばかりか大人にとっても難解な英語表現が出てくることである。従って、外国語学習を意識した絵本というものを使用することも英語Ⅲ、Ⅳの中では提案したい。

第二に、「保育英語」に関して、前述のような教科書を利用していくことと共に、検定試験の活用も念頭に置いた教育を行っていくのかについて可能性を検討することも重要である。以前より、工業英語や医学英語などその学部の専門性に関連した英語検定もいくつかあったが、数年前より、社団法人保育英語検定協会が主催している、「保育英語検定」^{註7)}が始まっている。また全国でいくつかの短期大学部や大学の幼児教育を専門としているコースがこの英語検定を単位として認定しているもしくはある級の取得を目指して授業を行っている。上記の2点のように「保育英語」に特化した内容の授業展開をすることは、前述の大学英語教育の5段階のうち、4 就職活動のためのキャリアアップの試験対策等の英語教育（キャリアアップ教養英語科目）5 学部高学年及び大学院も含めた専門書講読を含めた専門科目（専門教養英語科目）の観点の教育を意識したものである。このように、今後、本学の英語Ⅲ、Ⅳも EGP（English for General Purposes）の観点から ESP（English for Specific Purposes）の観点にシフトして教育していくことの可能性を考察したい。

第三に、さらに段階が進むと、日本の大学でも始まった学部の専門科目を英語で学ぶというレ

ベルになることである。学部の特科科目を英語で学習するということは、「英語を学習する」ことから、「英語で学習する」ということにつながる。今後、大学教育で専門科目を英語で教えていくということについてはさらに研究し、考察を進めたい。

追記

本研究は、平成24年度岐阜聖徳学園大学短期大学部研究助成金「映画を利用した効果的な英語学習―登場人物と映画台詞に焦点を置いた学習―」の研究成果の一部であることを記す。

註

註1) 愛知県産業貿易館で、2006年10月31日に行われた New Education Expo 2006 in Nagoya で、当時岐阜大学教育学部副学部長松川禮子氏（現在岐阜県教育長）が、セミナー「小学校英語教育の方向性」で述べたことである。

註2) EFL と ESL は、よく第二言語習得の分野で使用される用語である。ESL とは、English as a second language の略語で第2言語としての英語である。EFL つまり English as a foreign language の外国語としての英語と対比される。日本の場合の英語教育は後者に相当する。

註3) H.G. Widdowson の著書 *Teaching Language as Communication* (1978) の中で、定義されている用語である。コミュニケーションという観点からすれば、最も重要なのは記号（伝達的手段）ではなく、メッセージ（伝達する内容）である。メッセージは意味の集合体であり、コミュニケーション・アプローチでは、記号よりもメッセージ中心に教えられなければならないと、一般に考えられている。しかし、H.G. Widdowson は、記号とメッセージの両方を教えることが大切であると指摘している。当時、あまりにも行き過ぎたコミュニケーション・アプローチに対する批判として usage（言語用法）と use（言語使用）の両面を performance の中で考察したという点で、彼の研究は貢献した部分大きい。

註4) MANALOG「マナログ」とは、岐阜聖徳学園大学、短期大学部で今年度より始まった、学習 e-learning システムのことである。学習管理全般に応用できるので、語学学習であれば、予習や復習の課題や、英作文のレポート課題、web も利用して、授業外と授業内の相互作用を含めた blended-learning にも応用できるシステムである。

註5) *Tuesdays with Morrie* (Mitch Albom 1997) についてこの話は、実話でありモリー先生は、長年マサチューセッツ州ウォルサムのブランダイス大学社会学部で教鞭をとっていた教授である。それは、ミッチが大学卒業後、16年ぶりの再会だった。難病 ALS（筋萎縮性側索硬化症）に侵されていたモリー先生は、「あと4ヶ月か5ヶ月の命かな」と自分で分かっているが、それを嘆き悲しむことよりも、人に助けられることを楽しんだ。人生の意味について毎週火曜日に教え子のミッチに、教える講義が始まった。このテキストは筆者が英語Ⅲ、Ⅳで使用している教科書であり、その経験からもこのテキストを読むことにより、英語教育を通じての人間教育・教養教育の展開の可能性があるのでないかと考えられる。

註6) 寶壺 (2002) 「インターネットを利用した英語教育」, 『大垣女子短期大学紀要』第43号 pp. 29-40. の中で、ハワイを題材にして日本人が親しみやすい項目を15chapter 取りあげて英語学習教材を開発したことについて述べた。その時に、インターネットを利用した設問も開発

した。

註7)「保育英語検定」とは、平成23年7月より、社団法人保育英語検定協会が主催している、英語検定であり、国際的なグローバル化に対応できる幼稚園教諭・保育士の養成の一環として、園内保育及び保護者の方々との連絡・交流に必要な英語力を身につけることを目的としたものである。

引用文献・資料

- 1) 田中亨胤：児童期を中心として．田中亨胤，越後哲治，中島千恵編：未来に生きる教育．あいり出版．京都，p. 179， 2015.
- 2) 米澤亜香：日英対訳幼稚園教育要領．AIS 編：日英対訳幼稚園教育要領・小学校学習指導要領 Curriculum Guidelines of Kindergarten Education and Elementary Education. フォーイン．名古屋，p. 25， 2009.
- 3) 田中亨胤：児童期を中心として．田中亨胤，越後哲治，中島千恵編：未来に生きる教育．あいり出版．京都，p. 177， 2015.
- 4) 田中亨胤：児童期を中心として．田中亨胤，越後哲治，中島千恵編：未来に生きる教育．あいり出版．京都，p. 177-178， 2015.
- 5) 文部科学省：小学校英語活動実施状況調査（平成17年度）．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06031408/001/001.htm， 2004.
- 6) 文部科学省：「小学校における英語教育について」外国語専門部会における審議の状況資料 3－1．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/06032708/003.pdf， 2006.
- 7) 松川禮子編：小学校英語活動を創る．高陵社書店．東京，p. 148， 2003.
- 8) 文部科学省：「小学校における英語教育について」外国語専門部会における審議の状況資料 3－1．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/015/06032708/003.pdf， p. 11， 2006.
- 9) 小野博：e-learningにおけるドロップアウト軽減策．平成15年度メディア教育開発センター主催研修資料：大学における IT 活用教育の現状と展望．p. 74-78. 2002.
- 10) 池下裕次，Lutz，Kim A.編：サウンド・オブ・ミュージック．スクリーンプレイ出版．名古屋，p. 70， 1996.
- 11) 寶壺貴之：Arnold Schwarzenegger．寶壺貴之，Craig Alan Volker 編：The Lives and Times of Movie Stars. フォーイン．名古屋，p. 101， 2013.
- 12) 寶壺貴之：Hasta la vista, baby! 曾根田憲三，寶壺貴之編：アメリカ映画の名セリフ100. フォーイン．名古屋，p. 162-163， 2015.
- 13) Craig Alan Volker and Takayuki Hoko：Internet Surfing：Hawaii. Sankeisha Publishing. Nagoya，p.58-59， 2001.
- 14) 加藤拓理：たった4語で！英語の授業～英語が大の苦手な担任の先生のために～．中部日本教育文化会．名古屋，p. 3-7， 2012.
- 15) Albom，Mitch：Tuesdays with Morrie. Anchor Books，New York，p. 1， 1997.
- 16) 宮田学編：保育英語の練習帳．萌文書林．東京，p. 12-13， 2014.

参考文献

- 1) 保育英語検定協会：保育英語検定3級テキスト．本の泉社．東京，2011.
- 2) 寶壺貴之：映画の台詞とその Simplified Versions へのパラフレイズ．映画英語教育研究第4号，名古屋，p.69-80，1998.
- 3) 寶壺貴之：インターネットを利用した英語教育．大垣女子短期大学紀要第43号，岐阜， p.29-40，2002.
- 4) 井上智義編：視聴覚メディアと教育方法．北大路書房．京都，1999.
- 5) 町田隆哉，山本涼一，渡辺浩行，柳善和編：新しい世代の英語教育．松柏社．東京，2001.
- 6) ミッチアルボム著，別宮貞徳訳：モリー先生との火曜日．日本放送出版協会．東京，1998.
- 7) 中川素子他編：絵本の事典．朝倉書店．東京，2011.
- 8) 田中亨胤，名須川知子編：保育内容総論：ミネルヴァ書房．京都，2006.